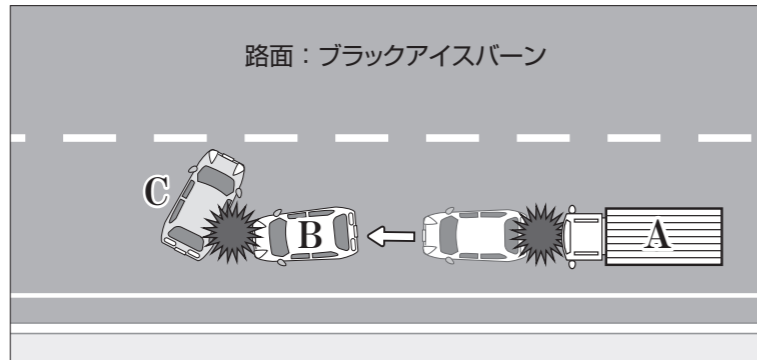


職場における交通安全指導

Part 103

大型貨物車が、凍結路面で普通乗用車に追突



事故の概要

●発生状況

日時：平成22年1月某日 午後7時頃
天候：曇り

●発生場所

片側1車線道路の国道

●事故の当事者

運転者A（大型貨物車）：29歳、男性
運転者B（普通乗用車）：32歳、女性
運転者C（普通乗用車）：45歳、男性

●被害状況

A：前部バンパー小破
B：頸椎捻挫等全治1か月、後部バンパー大破
C：右側面損傷

事故状況

運転者Aは、運転業務歴6年と仕事が慣れてきた若手ドライバーである。

この日Aは、横浜市内で雑貨を積んで、午後2時頃北陸方面に向け同僚と2台で出発した。天候は曇り、気温も低く寒気がきており全国的に寒い一日だった。高速道路に入ると、緊急の道路工事の影響もあって、ところどころ渋滞が発生しており、当初は先輩が運転する車の後に追従して走行していたが、他車の割り込みなどにより次第に距離が広がり、いつしか単独走行となっていた。渋滞の影響から指定時間が迫り、先輩の運転する車とはぐれてしまったことから、焦りを感じながら、少しでも追いつこうと繰り返し進路変更を

しながら走行していた。

午後7時ごろ高速道路のインターチェンジを降りると、小雪が舞っている状態で、路面は凍結しており、本来、速度や路面状況に十分注意すべきであったが、渋滞で予定より配達が遅れていることと、先輩とはぐれてしまったことが重なり、先を急ぐあまり警戒心が薄れていた。その時、前方でスリップして横向きに停止しているC車とその後方で停止しているB車を発見した。Aは停止しようとしてブレーキをかけたが、スリップしてそのままB車に追突し、衝突の勢いでB車は横向きになったC車に衝突した。

事故の原因は、路面が凍結していること知らず前方を注意深く見ていなかったこと、焦りからスピードを出し過ぎてしまったことである。

安全指導

①危険を予測した運転

Aは、運転や仕事に対し自信を持ち始めていた頃で、事故は起こさないと過信があったのかもしれない。天候や路面状態をみて、細心の注意を払い慎重に走行すべきところでした。

指定時間に遅れていることや先輩車両とはぐれてしまったことに意識が向き、焦りから警戒心が薄れてしまったといえます。

いついかなる時でも周囲の交通状況に対して危険を予測し、更に天候や路面の状態にも注意を向けて走行することが大切です。事例の道路状態の他、路面が凍結しやすい「橋の上」、「日陰部分」、

「トンネルの出入り口付近」、「切り通し」といった場所でも危険を予測して運転する必要があります。

運転免許を取得後、初めて道路に出たときは前を見て運転するだけで精一杯になり、他に注意を回す余裕などなく、緊張の連続で疲れたことがあると思います。これは運転に慣れておらず、適切に必要な情報を選択し、注意を振り分けることができていないためです。

また運転に慣れてくると、緊張感が薄れ、他の情報に気を取られて事故を起こすことがあります。適度な緊張感を持ち、適切に必要な情報を選択し、注意を振り分けることで事故のない安全運転を励行してください。

② スリップ事故の防止

冬季のスリップ事故の過半数が追突事故です。その中でも、前車の減速・停止に対応できず追突するケースが大半です。

スリップ事故が起きやすいのは朝方と夕方、朝は凍結した路面の表面が気温上昇などで解けだして濡れた状態になって滑りやすくなります。また夕方には日中に凍結した路面の水が再び気温の低下とともに凍り始めるため滑りやすくなります。

冬道の交差点やその付近では、多くの車がブレーキをかけた後発進を繰り返すため、圧雪・凍結路面が磨かれて滑りやすくなっている場合があります。交差点を走行する時は前車に漫然と追従するのではなく、前方の交通の流れにもしっかりと目を配り、前車の減速・停止を予測しながら早めのブレーキ操作を行うことが必要です。

一見、黒っぽく濡れているだけに見える路面の道路にも注意してください。「ブラックアイスバーン」と呼ばれ、実は凍結しているケースが多く、ドライバーは凍っていないと勘違いし、警戒心の薄れから事故に繋がるケースが多いので、黒い路面をみたら十分注意しましょう。

圧雪路面は、少し気温が上がって溶けかけている時が一番滑りやすくなります。

シャーベット状の雪は路面が見えているので安心感がありますがハンドルを取られることでスリップに陥りやすいので注意が必要です。

冬場の走行は、タイヤの状態が影響します。冬

用タイヤ（スタッドレスタイヤ）を装着することが大前提ですが、冬用タイヤを装着しても凍結路面での滑り易さは、基本的には解消できないことをしっかり認識して運転することが大切です。

③ 冬道走行のポイント

「ブレーキ操作」

冬道では、ブレーキを少し踏んだだけでも車輪がロックし、タイヤが滑走してしまう状況がよく起こります。

車輪がロックして滑走するとハンドル操作がしにくくなり、車体が横滑りをしたり、旋回することがあります。

冬道を走行する時は、ギアを低速に切り替え、エンジンブレーキを多用して、より慎重な運転に努めることが大切です。

「ハンドル操作」

急ハンドルは厳禁です。車の姿勢を乱し曲がりきれなくなります。またブレーキやアクセルとハンドルを同時に操作すると、車体が急激に横滑りをするスキッドや旋回するスピンを招きやすくなります。

必ずブレーキを緩めてからハンドルを操作しましょう。

「吹雪などによる視界不良時の対応」

前方が真っ白になり一時的に見えなくなっても急ブレーキは禁物です。思わぬスリップや後方から追突される恐れがあります。

見えない先に潜む危険を想定して速度を調整しましょう。前車が見える場合は、速度を同じにし、一定の車間距離を保ちましょう。

また、前が見えにくいと知らず知らず姿勢が前かがみになりがちです。意識して正しい運転姿勢を取ることに努めましょう。

「冬道での制動距離」

夏場の乾燥舗装路面に比べ、圧雪路面は約3倍、アイスバーンでは約6倍の制動距離が必要です。制動距離は路面の摩擦係数によって変化します。また、トラックの場合は、車重、積荷等の影響で通常より制動距離が長くなる場合があります。冬道での走行は、実際自分の車がどの程度滑るのかを認識し、スリップした時でも立て直せる余裕をもった運転を心掛けましょう。



スマホや携帯の「ながら運転」は危険

信号待ちでのスマホや携帯の使用は「前方不注視」による事故を招きます。
右左折時でのスマホや携帯の使用は「安全不確認」による事故を招きます。